

つるみの風

つるみの風 第44号
2021年3月27日発行
鶴見聖契キリスト教会
〒230-0074 横浜市
鶴見区北寺尾 1-16-7
TEL 045-572-0857

あなたはよみがえりを信じるか

春爛漫、桜の季節がまた巡ってまいりました。この紙面が皆さんのお手元に届く頃、鶴見高校や三ツ池公園の桜は満開でしょうか。昨年、桜の季節少し前から突入したコロナ禍もついに丸一年。緊急事態宣言は解除されるも、先行きを見通せない不安が私たちを覆っています。三・一一から一〇年経っても遅々として進まぬ原発廃炉作業、連日報道の政治腐敗、開催が見通せぬオリピック、ワクチン接種の遅れなども影響しているのでしょうか。でも、だからこそ毎年確実に巡って来る桜や季節の花の生真面目さ、確かさにいやされるのかもありませんね。春分を基点に毎年訪れるイースター、復活節もそうです。今年春分を過ぎて最初の満月が三月二十九日ですから、イースターは四月四日。年度始め、黒雲のようなコロナ不安を少しでも解消し、スタート出来たら、との思いを込めて紙面をお届けします。

●さて、ある人が病気に

お話の舞台は、紀元三三三年頃エルサレムから三kmほどのベタニア村です。登場するのは、マルタ、マリア、ラザロの三姉妹。ちやちや働き者の姉マルタと、物静かな妹マリアが、イエス一行を家にお迎えするにあたり、お料理でもてなすか

イエスの話に聞き入るかで一悶着あったエピソードはつとに有名です（ルカの福音書一〇・三八〜四二）。それもこれもイエスを愛すればこそその微笑ましさでしょう。おそらく末っ子だったろう弟ラザロの性格はわかりませんが、今日のお話では物言わぬ主人公です。そのラザロが病気で重篤となりました。姉妹たちは、電話もメールもない時代、歩いて一日ほどの場所にいたイエスに使いを送ります。「主よ、ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気で」（ヨハネの福音書一一・三二）。何をしてくれない、ラザロへのイエスの愛を確認し、事実を伝えただけ。実は、その後の展開を辿るとこの使いが三人の元を出発した直後、ラザロは死にましたからいずれにしても間に合わなかったのですが、愛し愛される関係の中で、抜き差しならぬ状況

●愛しているから留まる？



不可解なのは、知らせを受けてからのイエスの行動です。ラザロの病気を神の子たる自分が栄光を受けるためのものと告げて、何とこの場になお二日留まったのです。その後、イエスは墓へ行ってラザロをよみがえらせるという驚くべき奇跡

跡を行うのですが、意地悪く考えるなら、ラザロがすっかり死んでからよみがえらせることで自分が讃えられることを目論んだとも取れる行動。しかも、二日足踏みをした理由は「イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」（五）から、と。愛しているのなら、即座に駆けつけるのが人情ではありませんか。先ほどの「栄光」とも絡んで、何か重大な秘密がありそうですね。

●身内への人情にほだされず

二つの背景と文脈があります。ひとつは、身近な人に何かを頼まれて、意外なほど素っ気ない対応で断ったイエスの姿がすでに記録されていること。カナの婚礼でぶどう酒が尽きた時、母マリアから言外に奇跡を求められ、「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません」（二・四）とのつれない態度で応答しました。その後、奇跡は起きて、水がぶどう酒に変わるのですが、母の頼みで神の御子が偉大な力を行使することはなく、ご自身の主権とタ

●ラザロ復活が十字架の契機に

もうひとつは、この驚くべきラザロ復活の出来事が、ユダヤ指導者をしてイエスを十字架の死に向かわしめる決定的な契機となったこと。言うなればそれは、単に十字架へと追いやられたのでは断じてなく、人類の始祖アダムやユダヤ民族の始祖アブラハムの時から定められた神の救いの計画実現の時

が満ちたのであり、そのタイミングは頼まれて駆けつける人情とは無縁の、イエスの主権によるものでした。それを、イエスは「栄光」と呼びます。十字架の死こそ神の御子イエスの栄光。ラザロ危篤の知らせが届き、すでにラザロが死んだことを知っている二日後が、栄光の十字架に進むため、イエスをベタニアへと向かわせる時だったのです。



●イエスの憤り、動揺、涙

イエスがベタニア村の入り口に到着すると、マルタが出迎えます。「主よ、もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょう」（二・一）で始まるマルタと「あなたの兄弟はよみがえります」（二・三）と答えるイエスの対話は、どこかかみ合いません。なぜそうなのかは後ほど取り上げるとして、注目すべきはマリアが泣き、一緒に来たユダヤ人たちが泣いているのをご覧になったイエスが「霊に憤りを覚え、心を騒がせて」（二三）「涙を流された」（三五）ことです。

古来、この場におけるイエスの憤りと動揺、そして涙の意味は何か、多くの解釈がなされて来ましたが、おそらくは、ここま

●わたしはよみがえり、いのち

霊園を歩くと、墓石に刻まれたことばの数々に出会います。故人の好きだったことば、おそらく座右の銘を彫ったものや、残された家族への思いも。教会の墓地には聖書のことばが多いのですが、「わたしはよみがえりです。いのちです」はおそらくトップ3に入るでしょう。これは、ラザロはよみがえると告げられたマルタが、世の終わりの日の復活なら知っている、と答えたユダヤ人一般常識への曇りかけ。わたしはあなたを死後によみがえらせるとか、あなたに永遠のいのちを約束するとか、そんな霞の彼方の希望ではなく、「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです」（二五）との確固たる宣言。さらに続けて「また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません」（二六）と断言。ここま

●神とともに生きるいのち



やがて訪れる十字架の死から三日目によみがえったイエスは、ご自身がいのちそのものだからイエスを信じる者に、神なき孤独の死などあり得ません。「いのち」とか「生きる」とは、生けるまことの神とともに生きる生のことでしょう。ならば手ごわい死も超えられさうではありませんか。だから、

「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょう」とマルタが告げた際、「あなたの兄弟はよみがえります」とイエスは答えたのです。イエスにあってラザロは死んでいなかったのです。一瞬たりともラザロは神なき孤独に捨て置かれることなく、場所は離れていてもイエスが死せるラザロの傍らにいてくださったのです。その事実を公に知らせるため、イエスは人々の面前で、ラザロを死後四日目にして実際によみがえらせたのでした。

●あなたは信じますか

少し先走り過ぎました。イエスはマルタに「生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません」と約束した上で、「あなたは、このことを信じますか」（二六）と迫ります。肉体はやがて死ぬ。よみがえったラザロもいずれ死ぬ。でも、その死は死の一端でしかない。生きていて、よみがえりでありいのちであるイエスを信じる者は、イエスとともにその死をかくぐり、永遠に決して死ぬことがない。そこに私たちの今生きているいのちを賭け、乗せ、信頼するならば、もはや死は死でなくなるのです。私の手を握って離さないイエス、とのイメージでしょうか。そういうえば、トルコのイスタンブールにあるカリーエ博物館のフレスコ画「アナスタシス（復活）」は、よみがえったイエスがアダムとエバの手を両手に握り、墓から連れ出す構図。私が握るのではなく、イエスが握ってくださいさるのです。（裏面に続く）

（裏面に続く）